

観から偏見や差別が根強く残っているハンセン病も、水俣病も、AIDSも、その歴史的背景を知っているか否かでは、当然患者との接し方が異なってくる。前者と後者ではどちらが医師として理想的であるか、それは自明である。

「病気ではなく、病人を診る 医者になるよう、努めてください」

この言葉を贈ってくれたのは、私の大学時代の恩師である。先生はガンとの闘病中、今年9月に他界された。私は未だに気持ちの整理がついていない。それでも、目の前に進むべき道がある。どんなに海況が悪くても、コンパスが指し示す方向に進めば船が迷うことはない。海流に流されたら、その都度針路を修正すればいい。嵐がやって来たら、最寄りの港に避難すればいい。夜になったら、両舷の灯りをともそう。灯台の光を頼りに航海を続けよう。そして、もし救難信号が届いたら、面舵いっぱい全速力で助けに行こう。理想とする医師に一步でも近づけるように、少しぐらい格好が悪くても鮮やかな航路を描いていきたい。



後期が始まって

古波蔵 美 幸 (1年次)

皆さんはじめまして。今回1年次の近況報告をさせていただきます副年次長の古波蔵美幸です。

入学してから早半年が経ち、琉大生にとって年に一度の大イベント琉大祭の季節がやってきました。私達1年次は、琉大祭のために結成された実行委員10名を中心に活動していったのですが、みんな

初めてのことばかりで思ったように事が進まず、度重なる打ち合わせや準備に追われ大忙しでした。何とか迎えられた琉大祭当日には、医学科1年次のほぼ全員が販売に参加し、この半年で築き上げたチームワークで各自分担された仕事をこなしてきました。雨で客足が心配されたのですが、売れ行きの方もなかなか順調で、準備する段階でノルマが多すぎるのではないかと懸念されていた4品ですが、なんと早々と全てを完売することができました。味の方も評判で、中でも特に手間のかかった沖縄そばはとても美味しいと大好評でした。こうして学年一人ひとりが協力し合い、大成功に終わることができました。やり終えた後の疲労感は大変なものでしたが、この琉大祭を通して医学科1年次の結束がさらに強くなり、またそれぞれ良い思い出になったと思います。

長かった夏休みを終え、鈍っていた頭も授業の感覚を取り戻し、私たちはまた慌ただしい日々を送っています。後期からは1年次のメインイベントである救急車の同乗実習が始まり、すでに実習を終えた人たちは生の医療現場を肌で感じて、医学部生としての意識がいつそう高まったのではないかと思います。また前期に比べて、後期では大学に慣れたこともあり、授業の取り方なども工夫しながら自分の時間を有効に使えている人が多いようです。

つい先日入学したばかりかと思えば、もう来年の新入生歓迎の準備をしている今日この頃であり、月日が経つ早さに大変驚かされるばかりです。先輩から6年間という月日の短さを教えられたのですが、きっとこんな感じで6年間もあっという間に過ぎていくのかもしれないと実感しました。今後は今以上に一日一日を大切に、一緒に過ごしている大切な仲間達との時間を大切にしていきたいと思っています。

